

トロで鬼退治

池田 隆

アデン湾でタンカーがハマスを支援するイエメンの反政府組織フーシ派に襲われた。欧米の軍隊が出動するようだが、スエズ運河を通る船舶の殆どが喜望峰回りとなり、物流コストの急騰を招くという。今回はイランの関与が取沙汰されている。しかし先年のソマリア沖海賊事件と同じくアデン湾の両岸住民の貧困が原因の根底にある。このニュースを聞いて築地場外市場の「すしざんまい本店」に行きたくなった。インバウンドによる混雑やコロナ禍でこの数年ご無沙汰しているけれども、あそここの旨いトロには格別の想いがある。近海や大西洋のマグロが取れなくなり、インド洋での漁獲が増加した頃に、友人からこんな話を聞いた。

「すしざんまい」の有名な社長は「ソマリア国内でマグロ漁の方法を教え、漁船四隻を持つてきて与える。マグロの冷凍倉庫や流通設備を整え、すべて買い取る。そうすれば住民は海賊から本来の漁師に戻るだろう」と述べ実行した。その結果、年間三百件以上も発生していた海賊襲撃被害は以降急激に消滅した。

これはフェイクニュースだったらしい。暫くして立ち消えてしまった。しかし嘘であろうと、作り話であろうと、それはどうでも良い。ストーリーそのものが面白く、またそうあって欲しいと思う願いが込められている。

鬼退治して戦利品を持ち帰る「桃太郎」の童話や、酒で騙して酒呑童子を殺す伝説「大江山鬼退治」よりも根本解決法を具体的に示しており内容が奥深い。「三匹の子豚」や「狼と七匹の子羊」の西洋童話も悪い狼を殺す結末で終わるが、それでは次にまた別の狼が知恵を絞り直して復讐の連鎖が続くことだろう。

イスラエルとパレスチナの紛争では宗教的対立や軍事的解決が強調され過ぎてい。それに対し、列国が「すしざんまい」の寓話のように互恵的な経済対策を予め講じていれば、現状のように先鋭化・過激化することはなかったろう。

旨いトロなどを食べていけば、一般庶民は殺し合いなどする気は起らない。